

旧小布施邸（現 豊明小学校地区）の建築について

Architecture of the Former Obuse Residence
(The Present Homei Elementary School Area)

住居学科 高橋 由香里 鈴木 賢次
Dept. of Housing and Architecture Yukari Takahashi Kenji Suzuki

抄 録 日本女子大学附属豊明小学校の敷地はかつて、明治時代の新興ブルジョワジーである小布施新三郎の屋敷地で、邸宅が建っていた。また、この土地はもともと大名の下屋敷があった土地で、その頃に造園されたと思われる庭園を引き継ぎ、邸宅の創建とともに芝生園・自然風景式庭園も造園されたと考えられている。しかし、建物は1959（昭和34）年に移築、1975（昭和50）年には解体され、庭園も少しの遺構や当時の水路跡を見ることができるだけとなってしまった。そこで、保存されている学内建造物に関する史料を基に、敷地の変遷と創建時から解体されるまでの邸宅の姿を明らかにした。結果、敷地や庭園の利用方法の変化や存在意義、そして和風建築の邸宅内に洋風の内装や家具を取り入れる方法で邸宅を西洋化させていたことが判明した。明治時代の資産家の邸宅が、和風から洋風へ移り変わる時期の事例のひとつといえる。

キーワード：日本女子大学、旧小布施邸、明治時代、邸宅

Abstract The site of the Japan Women's University Homei Elementary School once belonged to Shinzaburo Obuse, a new bourgeoisie of the Meiji period, and it was the site of his residence. The residence was built on the site of a former Daimyo's lower house. When Mr. Obuse built his residence, he kept the original garden while changing parts of the grass garden and the natural landscape garden. This residence, however, was relocated in 1959 and demolished in 1975. As a result, only traces of some parts of the garden and the waterway can be seen today. The university documents concerning the buildings on campus were studied to find out about the history of the residence during the period when it was originally built and demolished. Through this study, it became clear that there were a series of changes in the utilization of the land and the garden. In addition, the residence had gone through a gradual westernization by changing its interior design and adding western furniture. It thus serves as an example of the architecture seen during the Meiji period, and how residences of wealthy families changed from Japanese style to Western style.

Keywords : Japan Women's University, former residence of Shinzaburo Obuse, Meiji period, residence

1. はじめに

日本女子大学にはかつて、豊明小学校地区に「桜楓クラブ/成瀬会館」と呼ばれ利用されていた建物が存在した。この建物はもともと小布施新三郎という人物が建築し、その家族が所有していたのだが、1951（昭和26）年に日本女子大学が敷地と共に購

入した。その後、1959（昭和34）年に建物が移築、さらに1975（昭和50）年には解体されてしまった。

現在、日本女子大学では学内にある建造物アーカイブの作成が行われている。これは、2012（平成24）年に111年目を迎えた大学の長い歴史の中で様々な建造物が建築されてきたが、設計図などの史料が散逸しつつあり、その歴史の整理を意図した

ものである。その際、この建物に関する史料が見つかり、アーカイブ作成の一環として整理することとなった。本研究では、かつて学園関係者に利用されていたこの敷地と建物を「旧小布施邸」と定義し、その姿の解明を目的とする。

研究方法は、地図資料や、日本女子大学が小布施家より敷地建物を購入する際と、建物の移築時に作成された図面、鉛筆画、写真などの史料を分析し、敷地の所有者・形状・利用方法の変化と、創建時・移築前・移築後の建物の様子を浮かび上がらせ、「旧小布施邸」の姿を解明した。なお、本研究では現在の日本女子大学の附属豊明小学校がある地区を「豊明小学校地区」、大学校舎がある地区を「泉山地区」、大学体育館が位置する地区を「体育館地区」としている。

2. 沿革

江戸時代、鳥羽藩主稲垣摂津守の下屋敷と岩槻藩主大岡主膳正の下屋敷が建っていた土地に、明治～大正にかけて活躍した実業家の小布施新三郎〔1845（弘化2）年～1925（大正14）年〕が、1899（明治32）年～1908（明治41）年の間に邸宅を建築した。これが「旧小布施邸」の出発である。

この小布施新三郎とは、須佐藩高梨村（現長野県須佐市）に生まれ、明治維新の頃に横浜の上海銀行に勤務しそこで古金銀の売買を学んだ後、東京・日本橋兜町で公社債株式仲買業を営む小布施商店（現ちばぎん証券）を開業し、相場師として財政界で大きな成功を収めた人物である。

旧小布施邸の建つ敷地は明治時代の規模から、1919（大正8）年～1922（大正11）年の間のいずれかの年と1951（昭和26）年の2度にわたり縮小が行われた。大正時代に行われた1度目の縮小は小布施家が土地を所有していた頃で、地図を見ると敷地東面の約3分の1程度が縮小している。昭和時代に行われた2度目の縮小は日本女子大学に敷地と邸宅の所有が移った頃で、敷地南東の一部が縮小しており、これは学園が敷地を購入する際に、この南東一部分を購入しなかったためだと考えられる。明治時代に邸宅を建築して以降、明治・大正・昭和中期まで、敷地を減少させつつも小布施家が所有していた「旧小布施邸」であるが、1951（昭和26）年12月に所有が日本女子大学（以下、学園）に移るとともに、敷地がさらに減少したのである。

敷地は新しい学園建物を建築する土地として利用され、1954（昭和29）年に「豊明講堂」、1958（昭和33）年には「桜楓館」が建築された。「旧小布施邸」は「桜楓クラブ」、直後には「成瀬会館」と名称を変え、大きな改修等が行われることなく学園関係者に利用された。

しかしその後、敷地内に附属小学校の新校舎が建築される計画が持ち上がり、1959（昭和34）年7月～12月にかけて「旧小布施邸」の主要部分は現在の体育館地区に移築、跡地には1960（昭和35）年3月に「豊明小学校/第一校舎」が建築された。以降、土地は豊明小学校地区として利用されている。敷地内ではその後も学園建物の新築・解体が繰り返され、「豊明小学校」の新校舎が1997（平成9）年に建築されて現在に至る。一方、移築された「旧小布施邸」は、「学生館」という名称に変わり学生のクラブ活動に利用されていたが、1974（昭和49）年の「大学体育館（大学第一体育館）」の新築をきっかけに、翌年の1975（昭和50）年に解体された。

3. 敷地の変化

(1) 所有者の変化と敷地の形状の変化

「旧小布施邸」は1899（明治32）年～1908（明治41）年の間に建てられたが、1859（安政6）年の古地図（図1）¹⁾に鳥羽藩主稲垣摂津守と岩槻藩主大岡主膳正の名を確認できるため、江戸時代、この敷地には稲垣家と大岡家の下屋敷になっていたことがわかる。

明治時代に入ってからの地図を辿ると、1886（明治19）年～1888（明治21）年の地図からは両家の名が消えて樹木記号が記載されている。1898（明治31）年の地図を見ても所有者ははっきりしないままであるが、1909（明治42）年の地図（図2）より「小



図1 1859年



図2 1909年

布施邸」という文字が現れる。

つまり、確認できた地図から考えると、この敷地は、もとは稲垣家と大岡家の両者の下屋敷にまたがった土地であったが、明治に入ってからの上地令により国有地となったことがわかる。地図記号から予測すると、畑地であったのかもしれないし、樹木が生い茂る雑木林ようになっていたのかもしれない。その後、1899（明治32）年～1908（明治41）年の地図を辿ることができなかったが、この期間内に小布施新三郎の所有地になったと推測できる。

広大な敷地は小布施家の所有となったが、地図（図3、4、5）²⁾を辿ると1909（明治42）年～1919（大正8）年の間と、1952（昭和27）年に、敷地が縮小していることがわかる。1度目の縮小の理由は不詳だが、2度目の縮小の理由は「所有者の変化」である。

1956（昭和31）年～1959（昭和34）年の地図とそれ以前の地図を比較すると敷地の形状が変化している。これは1951（昭和26）年に日本女子大学（以下、学園）が「旧小布施邸」を、元の敷地の形状のままではなく、一部を残して購入したためである。全

敷地を購入しなかった理由は不明である。

以上のように、この敷地は分かれていたふたつの敷地を小布施新三郎が明治時代後期に購入して自邸を建築したことにより大きなひとつの敷地となった。その後、小布施家が所有していた大正時代と、「旧小布施邸」の権利が日本女子大学に移った昭和時代の第二次世界大戦直後の2回、敷地の縮小が行われ、その形状が変化したのである。そして、学園にその所有権が移行してから現在までの間、敷地の形状は変化していない。

（2）敷地利用の変化

「旧小布施邸」の敷地は、江戸時代は大名の下屋敷であった。明治～昭和中期は小布施家の所有となり、邸宅が建築された。第二次世界大戦後～現在は学園の所有となり、学園建物が建築された。つまり、所有者の変化と共に敷地の利用方法も変化したのである。

江戸時代に大岡・稲垣両家の下屋敷が建っていた頃、少なくとも大岡家の敷地内には庭園があったと考えられる。既往研究『旧小布施邸の庭園（現豊明小学校の崖下教材園）の復元』³⁾によると、大岡家の敷地内には小規模ながらも庭園があったと推測されている。その根拠として、『高田の今昔 一名「雑司ヶ谷盛衰史』』⁴⁾に記載されている風景図には対象としている地域が、「大岡ヤシキ」と記され建物と樹木が描かれており、この絵図に「旧小布施邸」が記載されている地図を比較すると、地図上で庭園となっている部分と絵図の樹木が描かれている部分が符合すると述べている。したがって、江戸時代には敷地内に作庭が行われていたと考えられるのである。なお同研究では、絵図の他の部分で「庭園」という記載を見ることができるため、大岡家のものはそのような庭園、近くの旧細川家下屋敷庭園（現新江戸川公園）のような回遊式の規模ではなかったとも述べている。そして上地令が明治政府より出されてからは、地図から推測するとこの土地は明治政府に没収され、次の所有者が決まるまでは国有地として桑の木を育てるなど、耕作地として利用されていたと考えられる。

小布施家の所有となってからのこの敷地は、個人の邸宅用地として利用され、建物が新築された。日本女子大学が所有する史料のひとつである「旧小布施邸」のスケッチや現存する遺構から、敷地内には



図3 1919-1922年



図4 1951年



図5 1956-1959年

庭園が設けられていた。前述の既往研究ではこの庭園の姿を、敷地の東側を芝生園、西側を小布施氏のような明治時代の新興ブルジョアジー達が好んだ自然風景式庭園であったのではないかと推測している。そして「旧小布施邸」建築当初、この庭園には池が三ヶ所とそれに付随する水路があり、江戸時代の大岡家所有の頃の庭園でもその池や水路があったのではないかと、とも推測している。ただし地図によると、この池は敷地の縮小や利用方法の変化に伴い1937（昭和12）年の時点では二ヶ所、1952（昭和27）年では一ヶ所と、数も規模も少なくなり、現在では溜池の様なものと水源の痕跡を確認できるだけとなっている。

「旧小布施邸」の権利が学園に移行したのは1951（昭和26）年12月のことである。学園建物の建設用地として小布施家の敷地の一部を残し、建物ごと購入した。この敷地内の建物は学園附属の小学校校舎が建築されるまでの間、「桜楓クラブ/成瀬会館」という名称で学園卒業生団体の桜楓会や学生が利用していた。

小学校校舎建築直前の1959（昭和34）年7月1日に発行された『櫻楓新報』という学園機関紙に、「芝生にはしばしの時を惜しんで学生が集まってくる。足を投げ出しておべんとうを食べている学生、木曜の午後には、指導者を中心に円く座って語り合っているクラス、時にはコーラスをしたり、そして、静かな放課後には本を読んでいる学生の姿もみかける。」⁵⁾とあることから、「旧小布施邸」の権利が移行してしばらくの間、敷地の庭園部分は学園関係者に「学園の庭」として利用されていたと考えることができる。しかし、1960（昭和35）年に附属小学校（以下、豊明小学校）の新校舎「豊明小学校/第一校舎」が建築されたことをきっかけに大きくその姿を変え、小布施氏によって作庭された「庭園」としての形を失ってしまう。新校舎を建築するにあたり庭園西側が整地された後に植物が植えられ、庭園としてではなく豊明小学校の教材園のような利用がなされるようになり、1981（昭和56）年に西側部分の本格的な造成を行い「教材園」として整備された。この頃までは東側部分は放置され荒れていたのだが、1997（平成9）年に「豊明小学校」を新築するにあたり教材園の規模が縮小されたため、1995（平成7）年に新たな教材園として「野草園」が造成された。1998（平成10）年には東屋と藤棚、

そしてポンプが設置され、「豊明小学校/第一校舎」建築の際の整地により消えかかった池を新たに整備、2001（平成13）年頃より歩道や階段の整備を行うなど、「教材園」は少しずつ変化をしていった。個人邸宅の「庭園」は学園に所有権が移ってからは「学園の庭」となり、現在では「教材園」として豊明小学校の理科の授業で利用されているのである。

またこの敷地には、学園建物の建設用地として様々な建物が建築された。まず1954（昭和29）年には「豊明講堂」という豊明小学校の講堂が建築された。この建物は、1974（昭和49）年に「豊明小学校第二校舎」を建築するため、前年の1973（昭和48）年に解体されている。1958（昭和34）年には「桜楓館（新館）/桜楓館一号館」が建築。その後1988（昭和63）年に建物東側を解体し、翌年、その跡地に「桜楓館新館/桜楓館二号館」を隣接して建築している。1960（昭和35）年、前年に体育館地区に移築した「旧小布施邸」の建物跡地に「豊明小学校/第一校舎」を建築。この校舎は、1997（平成9）年に「豊明小学校」を新築するにあたり1996（平成8）年～1997（平成9）年にかけて解体されている。1969（昭和44）年に豊明小学校のプールとして「豊明プール」が建築されるが、これも1995（平成7）年に「豊明小学校」を新築する際、解体された。桜楓会の施設として1975（昭和50）年に「桜楓館別館」の建築もされている。そしてこの敷地には、新築以外にも1963（昭和38）年に学園の泉山地区から茶室「静寧亭」が移築されている。以上のように、学園の所有になってからは主に豊明小学校と桜楓会に関する建物の建設用地として、敷地が利用されるようになったのである。

このように、敷地の所有者が変わることにより敷地の利用方法は変化していった。特に、学園に所有が移ってから庭園部分が、元は芝生園・自然風景式庭園であったものから、最終的には小学生が理科の授業で利用する教材園となったことが一番の変化といえるだろう。ただ、庭園として利用されていた頃と比較するとかなり変化したと言えるだろうが、水路の護岸の石組みや石橋、水源の痕跡など、現在でも当時の様子を振り返ることができる遺構を見ることはできる。また、泉山地区からこの敷地内に茶室を移築してきた。現在では庭園の印象が薄れてしまっているが、当時はここに庭園の跡を見ることができたので、移築に好都合であったということも

移築先の理由に考えられる。敷地の利用方法やその形状も変化したがる、そこに庭園があったという事実は明記されるべきである。

4. 建物の変化

次に、「旧小布施邸」の敷地内に建っていた建物について検討する。小布施新三郎という明治を代表する新興ブルジョワジーの邸宅であったが、建物に関する史料は創建時のものが無く、現存する史料で一番古いものは、学園が「旧小布施邸」を購入した頃の1952（昭和25）年のものであるため、この頃からの建物の変遷を追うことにしたい。

(1) 創建時の邸宅

「旧小布施邸」の邸宅は1899（明治32）年～1908（明治41）年の間に建築された、木造平屋建て（一部、2階建て）で、瓦葺き（一部、銅板葺き）の建物である。

1909（明治42）年の地図と1952（昭和25）年

の実測図「小布施家実測図」（図6）を比較すると、建物の形が少し違うことがわかる。また、建物が建った時点で最少でも43年は経過していることを考えると、創建時より多少の増改築が行われたことが考えられる。

実測図を見ると、来客用玄関の車寄せがあるオモテには、○で囲まれた「洋」と記された応接室・食堂・客室が配されていることがわかるが、ここは接客のための部屋として機能していたと考えられる。本研究ではこの部屋を「洋間」と考えた。この「洋間」以外の部屋は、記されている数字が帖数のため和室である。その中でも、庭園に対し突出させて配置している「洋間」に続く部屋を「日本間」と考えた。この部屋は眺望が良く、そして室内に「飾り暖炉」が設えてあることから、時には接客の機能も果たしていたと考えられる。また、「日本間」に続いてその奥にある部屋を「私室」、洋間の後ろに中庭を挟んで接続する形で配置されている部屋を「女中部屋」とした。この他に実測図上では、「日本間」



図6 「小布施家実測図」（抜粋）

のウラに「土蔵」、「私室」のウラには「浴室」という書き込みを見ることができる。この建物はそれぞれの部屋が別棟のような形式になっており、「洋間」「日本間」「私室」が雁行のように配置されているが、これは「旧小布施邸」最大の特徴と言える。さらに、洋風の部屋を設置していることも、明治時代の新興ブルジョワジーの邸宅ならではの特徴だと言えらう。

(2) 移築前の学園内での邸宅

「桜楓クラブ/成瀬会館」

移築前、学園が購入してから邸宅は、「桜楓クラブ/成瀬会館」という名称となった。先述した通り、この建物は1959(昭和34)年に移築作業が行われた。この移築前に関する史料は実測図の他に、「日本女子大学 桜楓クラブ浴室増築設計図」やそれに関連した資料、芝生園側から南北方向に建物を精緻にスケッチした鉛筆画などがあり、そこから移築前の建物の姿を推測することができる。

鉛筆画(図7)からは、この建物の「洋間」と「日本間」の南側立面を推測することができる。学園の所有になってから殆ど改築することなく利用されていたため、この鉛筆画から読み取れる建物の立面は、建築当時の建物の外観であろう。

まず「洋間」の外観についてであるが、「洋風建築」といった要素は全く感じられず、あくまで「和

風建築」である。また、スケッチなので遠近感に多少疑問は残るが、「日本間」に比べて高さがあり、更に長めの東が瓦屋根の下部に入っていることから、もしかしたら天井が高かった可能性がある。建具で特徴的なのは腰高紙障子の意匠で、上部分の格子が細かくて下部分の格子が大きく、真ん中の部分はガラスのような表現を見ることができるため、接客の部屋にふさわしく洗練されたデザインが施されていたのではないだろうか。そしてよくよく観察すると、「洋間」の食堂部分にテーブルのような家具を見ることができる。このことからこの「洋間」は、建物の外観は和風建築そのもののままで、椅子座の家具を置いたり、天井を高くするなど、室内側で「洋風」を表現していたと考えられる。

次に「日本間」についてだが、外観が非常に特徴的で、寺院建築のような雰囲気を持っているのである。室内から芝生園に向けて階段を二ヶ所設けていたり、深い軒など寺院建築の要素を見ることができる。特に、腰高紙障子の意匠に花頭窓を用いていることがそれを際立たせているのである。

そして「浴室」の増築についてであるが、小布施家所有時より、母屋に対し離れのような形で浴室は設置されていたことが実測図から読み取ることができる。「日本女子大学 桜楓クラブ浴室増築設計図」はそれとは平面プランが違うため、1955(昭和30)年に同じ位置に新しく浴室を増築したと考えられ

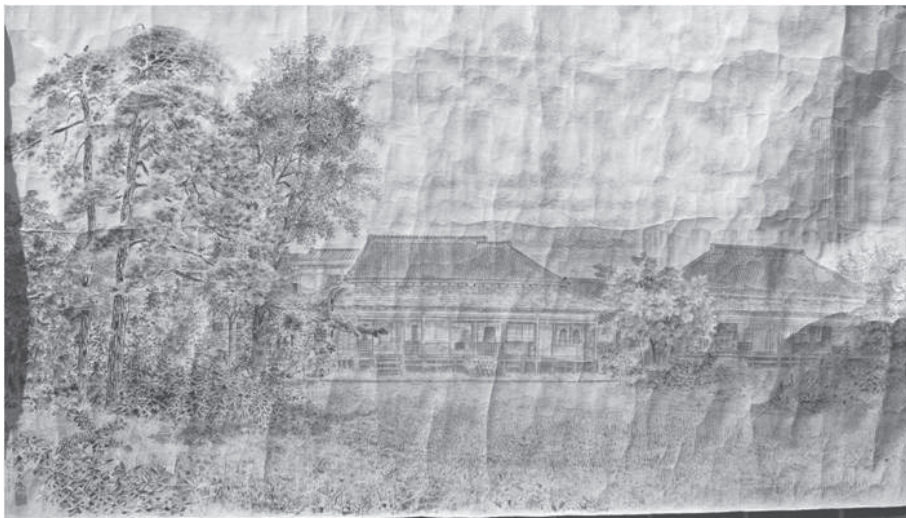


図7 旧小布施邸の鉛筆画(成瀬記念館 所蔵)

る。図面によるとこの浴室は、基礎はコンクリートで木造、屋根は瓦棒葺き、内装は漆喰壁とモザイクタイル仕上げであった。

以上が、学園に残る建造物に関する史料から辿った、移築前の邸宅の様子である。なお、これは先に述べた通り小布施氏が建築した当時の様子に近いものだと考えられる。

(3) 移築後の学園内での邸宅 「学生館」

1959（昭和34）年、「豊明小学校/第一校舎」を建築する関係で体育館地区への移築が行われた。移築計画は、大西一級建築士事務所の大西幸雄によって行われたが、この時に「日本女子大学成瀬会館移築工事」（図8）という図面が描かれた。この図面史料と、移築前の実測配置図の史料の比較を行うこ

とで、移築後の建物の変化を明らかにすることができる。この移築作業は解体して、建物全体でなく一部を残すという作業だったため、移築後の建物は完全に平屋建てとなり、「学生館」という名称で学生たちのクラブ活動に利用されていた。

この邸宅は全てをそのままの形で移築されなかったことが明らかになった。移築したのは、「洋間」と「日本間」だけで、そこに新たに3つの「洋間」を増築したのである。また、平面を比較すると応接室の広さに差があるため、この部分も増築を行った可能性が出てきた。

そして、一番大きく変わったのは平面構成であろう。元は雁行に配置されていた「洋間」と「日本間」であるが、移築先では中庭を作らず、廊下で繋いで直線的に配置されたのである。おそらく、雁行に配置することは庭園に向かうことで意義があった

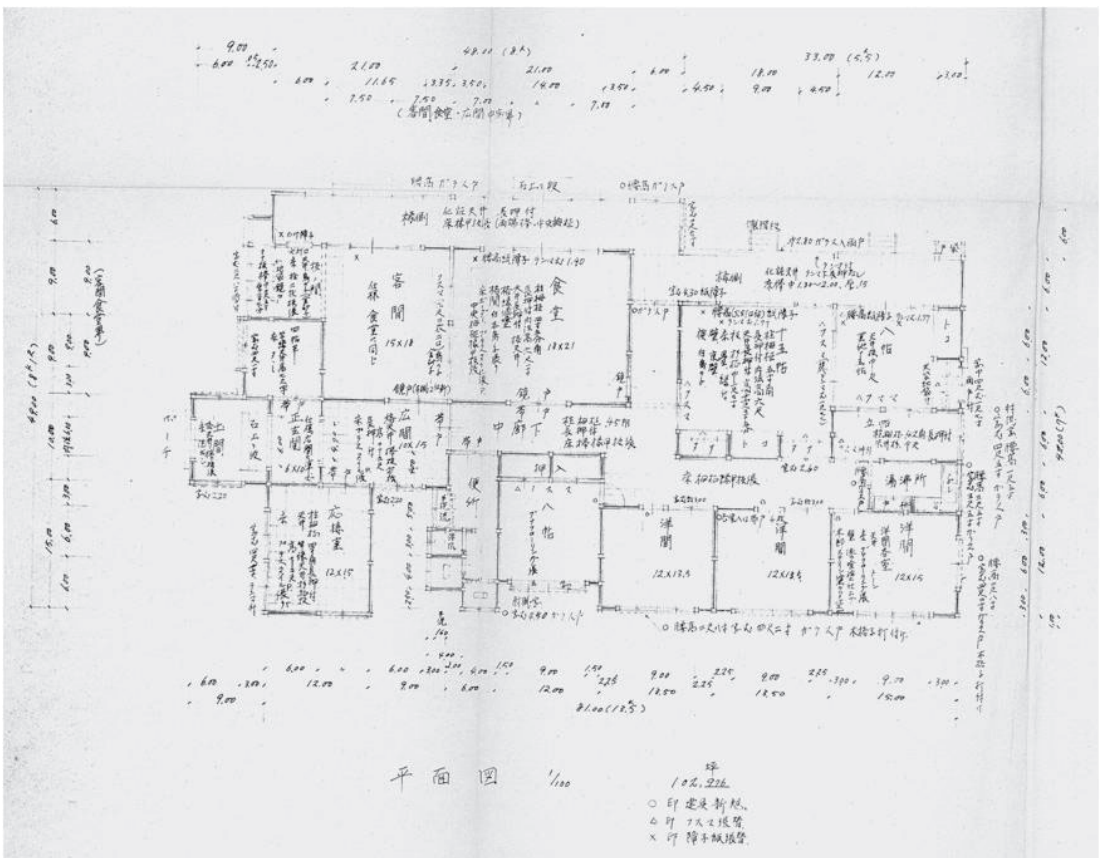


図8 「日本女子大学成瀬会館移築工事」（抜粋）



図9 「飾り暖炉」

ため、体育館地区は庭園もなく、クラブ活動用の部室という機能をもたされた結果、ほぼ平行の利用しやすい平面に作り直してしまったのだろう。

また平面図や立面図から、学生が利用しやすくするために南側の濡れ縁部分にガラス入り雨戸を入れることで立面にも多少の変化があったことや、部分展開図から、日本間の飾り暖炉が「床」に変更されたことが明らかである。しかし、移築後に撮影されたと考えられる写真⁶⁾では、この「床」部分は「飾り暖炉」(図9)のままになっていたため、変更されなかった可能性がある。なお、この写真には「旧樺山伯爵邸」という表記が見られるが、この頃すでに「旧樺山伯爵邸」が存在していないことと、図面史料から考えた結果、この写真は「旧小布施邸」のものである。その他に、「日本間」の特徴であった花頭窓の腰高紙障子そのままの形で残っていたり、東側立面図を見ると車寄せがそのまま「玄関」として転用されるようになっているなど、主要な部分が移築前と変わっていないことを図面史料より読み取ることができた。

一方、移築しなかった部分の行方であるが、史料には「女中部屋」は売却、「浴室」は「台所」に改築、「私室」の二階部分は改修とある。現時点では明確ではないが、「浴室」と「私室」はしばらくの間、豊明小学校地区に残されていたのかもしれないということが考えられる。

以上が、移築後の邸宅の姿である。建物全体ではなく、一部しか移築を行わなかったが、この建物の特徴である「洋間」と「日本間」を移築することで、

学生たちが利用しやすいような形に改められた結果になったといえる。

5. まとめ

本研究で対象とした「旧小布施邸」の建築は和風の本造建築であった。明治時代の創建時、「日本間」「洋間」「私室」が庭園に対して雁行に配置され、「女中部屋」「土蔵」が雁行に並んだ建物と中庭を挟んで裏に配され、これらが連なっているような平面形式をとっている。「洋間」は玄関部分の車寄せ・応接室・食堂・客室から成り、主に接客の場として機能していたと考えられ、「日本間」は他の部屋より庭園に対して突出しており、部屋から地面に対して延びている木製の階段の存在も相まって、まるで庭園に連続したような印象を持つ。

建物にとって「庭園」はかなり大きな存在であった。この場所には江戸時代、大名の下屋敷が建っていたが、そこにあった庭園の一部を引き継いで小布施氏が新たに造成した。日本女子大学の所有になってからもしばらくの間は庭園として利用された。その後、教材園として利用されるようになり、現在でも、小布施氏時代の庭園の遺構や水源を見ることができる。つまり、どの時代でも庭園は利用され続け、現在でも学園と切り離せない存在となっているのだ。「庭園」は、敷地の歴史を検証する上で非常に重要な遺構となっている。

「旧小布施邸」に関する史料には、学園が建物を取得して移築が行われる前に描かれた、創建時のままだと考えられる建物南側立面のかなり細かく描かれたスケッチが残されていた。これは、当時の建物の様子を知ることができる非常に貴重な史料で、そこからは外観の様子他に、室内の様子を伺い知ることができる。

外観についてであるが、この建物は「洋間」があっても、まったくの「和風建築」の外観をもっていたことがわかった。例えば、「洋間」にある車寄せには懸魚のついた屋根がかかっており、「洋間」であるが「洋風」の要素が見当たらないのである。ただし、スケッチに描写された食堂部分から室内の一部分を見ると、猫足のテーブルのようなものを見ることができるので、椅子座の生活をしていたことは間違いなく、そして「日本間」の室内の当時の様子を一部分だけ見ることができるのだが、洋風の飾り暖炉がある。このことから、外観や造りはあくま

で日本建築で和風になっているが、内装や家具などで洋風の要素を持ち込むことで「洋間」の演出を行ったり、和洋折衷の雰囲気を作っていたのではないだろうか。

この建築が建てられた明治時代は、洋風の建物を建て、そこで西洋文化を取り入れた生活を送ったり、接客を行うことがひとつのステータスであり、上流階級、特に特権階級の間では洋風建築で「洋館」を作ることが流行した。そのような社会背景がある中で、「旧小布施邸」の建築は前述した通り和風建築であるが、その中に「洋間」を設えたり洋風の調度品を設置するなどして、特権階級の間でいう「洋館」の役割を果たす空間を日本建築の中に作り出した。建物の建築主である小布施新三郎は、資産家ではあるが明治時代の実業界で成功した新興ブルジョワジーで、公家や華族、財閥といったいわゆる特権階級とは違う。すなわち洋館を建築するほどの資産家ではない人物が、自宅に「洋風」を持ち込むことで、西洋文化を享受し実践する生活を取り入れたのである。このことから「旧小布施邸」は、明治時代の新興ブルジョワジーが邸宅を西洋化しようとした工夫を見ることができる事例のひとつだと言えるだろう。

邸宅は現在、残念なことに解体されてしまっている。しかし「旧小布施邸」に関する史料が残っているため、本研究のように当時の姿を検討することができた。また、邸宅の姿を検討したことで、「明治

時代の新興ブルジョワジーの邸宅が西洋風へ移り変わる際の事例」という、「建物が持つ特徴」を見出すこともできた。

謝辞

日本女子大学附属豊明小学校の教材園の調査におきまして、小学校教頭 辻誠治先生（農学博士）に大変お世話になりました。また、大田淑恵さんには庭園関係の調査資料を卒業論文としてまとめていただきました。記して厚く感謝申し上げます。

註記

- 1) 地図資料編纂会：5千分の1 江戸—東京市街地図集成—1657（明暦3）年～1895（明治28）年一，柏書房，東京，143（1988）
- 2) 地図資料編纂会：5千分の1 江戸—東京市が地図集成Ⅱ—1887（明治20）年～1959（昭和34）年一，柏書房，東京，196，200-201（1990）
- 3) 大田淑恵：旧小布施邸の庭園（現豊明小学校の崖下教材園）の復元，日本女子大学家政学部住居学科2010年度卒業論文（2010）
- 4) 江副広忠：高田の今昔 一名「雑司ヶ谷盛衰史」，三才社，東京（1930）
- 5) 桜楓会：桜楓新報（複製版），日本女子大学図書館，2，昭和31年7月1日発行部分（2007）
- 6) 日本女子大学：創立六十周年記念写真集 日本女子大学，日本女子大学，東京，38-39（1961）